

# 教育哲学会大会 プログラム

第63回

## 研究討議

### 精神分析と教育

・戦研究発表

・部会1「日本の教育哲学とその周辺」

・西田幾多郎と木村柔圃の自由意志論―木村の教育学への転向をめぐる―

・晩年の福沢における教育目的への問い

・無の思想における意思の問題―大野直道『無』について―

・「世界内存在」のプラクティスとヘンリーの「道徳」批判に注目して

・宮沢賢治の教師像―『黒野原の妖怪譚』に見る自由意志と教育の問題を軸に―

・部会2「教育哲学と社会」

・マルティン・ハイデガーとシュレーギンの教育思想の特質

・シュレーギンとハイデガーの教育思想の諸相

・デカルトの教育思想と『世紀ドクトリン』のメタフィジクス

・初期ヘンゼンにおけるしるしと『上野野郎』を軸に

・アドルノの具現性論における具現性

・「ワロウ」における「自己実現」論の具現性―『ワロウ』を軸に―

・部会3「教師と教育関係の成り立ちと変遷」

・教師の役割とはいかになるものか―ジャック・デリダの指す教師像について―

・「自己実現」の思想における判断力の形成―良心(Conscience)概念の検討を中心に―

・教師が与える実践的問題の教育可能性に関する検討

・「エンターバー」における教育関係論の構想―対話の「相互性」と「非対称性」を手がかりに―

・カンパの口頭編

・部会4「教育における承認と政治」

・後期ミシェル・フーコーにおける承認論の再検討

・「承認」の政治―フーコーにおける承認論の代理法案をめぐる―

・フーコーの生権力理論からみた中国における感徳教育

・「マイノリティ」としての「承認」―フーコー、オートンと「承認」のウェイトブランチを軸に―

・事例1

・事例2

・事例3

・事例4

・事例5

・事例6

・事例7

・事例8

・事例9

・事例10

・事例11

・事例12

・事例13

・事例14

・事例15

・事例16

・事例17

・事例18

・事例19

・事例20



日本大学文理学部 | 2020/10/17(土) - 18(日)



## 大会案内

教育哲学会第63回大会を10月17日(土)・18日(日)に開催いたします。今大会は、新型コロナウイルス感染拡大により、開催校である日本大学文理学部に参集することが困難なため、オンラインでの開催となります。

一般研究発表および研究討議は、例年の『発表要旨集録』に代えて、10月上旬発送予定の『発表原稿集録』をもって**発表・報告とします**。そのうえで、17日(土)・18日(日)にウェブ上で参加者からの質問・コメントを募り、大会終了後、事前申し込みをされた参加者(一般研究発表は各部会、研究討議は希望者)に質疑応答を文書で送付する予定です。

総会(教育哲学会奨励賞受賞者発表含む)、ラウンドテーブル、次世代育成企画は、18日(日)にオンライン会議システム(Zoom)で開催する予定です。

**参加申込方法も通常と異なり事前申し込み制となります**。異例づくめの大会となり、何かとご不便をおかけいたしますが、会員の皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

## 大会参加費

大会参加費：一般 2,000円 / 学生・院生・非常勤 1,000円

## 大会参加申込について

1. **本大会はすべて事前申し込み制です**。「参加申込フォーム」(2ページに掲載)より**9月15日(火)まで**にお申し込みください。
  - 一般研究発表:参加を希望される部会をお選びください。(複数選択可)
  - 研究討議:参加・不参加からお選びください。
  - 総会:参加・不参加からお選びください。
  - 次世代育成企画:参加・不参加からお選びください。
  - ラウンドテーブル:参加を希望されるラウンドテーブルを一つお選びください。
2. あわせて上記参加費を9月15日(火)までに下記の振込先にお振り込みください。

ゆうちょ銀行

口座番号:11390-06393531

加入者名:教育哲学会第63回大会準備委員会

## 大会日程

10月17日(土)・18日(日)

大会期間中	一般研究発表 ・『発表原稿集録』(参加申込者に事前送付)による報告 ・参加申込者のみウェブ上で質疑・コメント可能 ・参加申込者にのみ質疑応答集を送付(大会終了後)
大会期間中	研究討議 ・『発表原稿集録』(参加申込者に事前送付)による報告 ・参加申込者のみウェブ上で質疑・コメント可能 ・参加申込者にのみ質疑応答集を送付(大会終了後)

10月18日(日)

10:30~12:00	次世代育成企画 ・オンライン会議システム(Zoom)での開催
12:00~13:00	昼食休憩
13:00~14:00	総会 ・オンライン会議システム(Zoom)での開催
14:15~16:15	ラウンドテーブル ・オンライン会議システム(Zoom)での開催

## 参加申込フォーム

下記 URL または QR コードよりお申し込みください。学会ホームページからもアクセスできます。

<https://forms.gle/VaDzcX2fq5d2r7xm9>



## 一般研究発表における質疑応答の方法について

- (1) 一般研究発表の各報告への質問、コメント等(以下、質問)は、大会準備委員会にて準備した Google Forms の「質問フォーム」によって受け付ける。
- (2) 「質問フォーム」は部会別に作成し、質疑応答の公開対象は部会の参加者に限る。参加希望者は、大会参加申込時に「参加申込フォーム」に参加希望部会を入力する。また、参加部会の追加を希望する場合には「質問フォーム」で参加部会の再登録を行う(原則として、希望申し込みをした上での取り消しは出来ない)。
- (3) 質問の受付期間は 10 月 17 日(土)・18 日(日)(大会期間中の 2 日間)とする。
- (4) 部会別の「質問フォーム」に寄せられた質問は、各部会の司会者が指定するメールアドレスに大会準備委員会から送付する。
- (5) 各部会の司会者は、「質問フォーム」にて寄せられた質問を 10 月 25 日(日)までに質問の宛先(報告者)やテーマごとに取りまとめ、各報告者に送付する。
- (6) 各報告者は、司会者より連絡を受けた質問への回答を 11 月 12 日(木)までに作成し、各部会の司会者に送付する。
- (7) 各部会の司会者は、報告者からの回答を取りまとめ、大会準備委員会に送付する。
- (8) 大会準備委員会は、上記でまとめられた各部会の質問・回答を、11 月中旬を目途に各部会の参加者に Eメールの添付ファイル(パスワード付き)として送付する。

## 研究討議における質疑応答の方法について

- (1) 研究討議への質問、コメント等(以下、質問)は、大会準備委員会にて準備した Google Forms の「質問フォーム」によって受け付ける。
- (2) 質疑への参加、また質疑応答の公開対象は事前登録した者に限る。参加希望者は、大会参加申込時に「参加申込フォーム」から「研究討議」の「参加」にチェックを入れる。大会参加申し込み後に追加で参加希望をする場合には「質問フォーム」で再登録を行う(原則として、希望申し込みをした上での取り消しは出来ない)。
- (3) 質問の受付期間は 10 月 17 日(土)・18 日(日)(大会期間中の 2 日間)とする。
- (4) 研究討議の「質問フォーム」に寄せられた質問は、司会者が指定するメールアドレスに大会準備委員会から送付する。
- (5) 司会者は、「質問フォーム」にて寄せられた質問をテーマごとに取りまとめ、各報告者に送付する。指定討論者による質疑・コメント等も、この際に司会者を通じて各報告者に送付される。
- (6) 各報告者は、司会者より連絡を受けた質問への回答を作成し、司会者に送付する。
- (7) 司会者は、報告者からの回答を取りまとめ、大会準備委員会に送付する。
- (8) 大会準備委員会は、上記でまとめられた質問・回答を、11 月中を目途に参加者に Eメールの添付ファイル(パスワード付き)として送付する。

2020年10月17日(土)・18日(日)

一般研究発表

第1部会

---

## 日本の教育哲学とその周辺

司会：岡部 美香（大阪大学）・衛藤 吉則（広島大学）

西田幾多郎と木村素衛の自由意志論  
—木村の教育学への転向をめぐって—

高谷 掌子（京都大学・院生）

晩年の森昭における教育目的への問い

川上 英明（東京大学・院生）

無の思想における善悪の問題—天野貞祐の「無私」について—

山田 真由美（北海道教育大学）

「世界内存在」のプラクシス  
—ハイデガーの「道具」概念に注目して—

森 七恵（京都大学・院生）

宮沢賢治の教師像

—『摂折御判／僧俗御判』に見る日蓮主義「受容」の問題を通して—

深田 愛乃（慶應義塾大学・院生）

第2部会

---

## 教育哲学と社会批判

司会：大関 達也（兵庫教育大学）・辻 敦子（立命館大学）

マルク＝アントワーヌ・ジュリアンの教育思想の特質

吉野 敦（早稲田大学・院生）

シュティルナーの反教育学の諸相

成田 龍一郎（東京大学・院生）

ディルタイの教育学と19世紀ドイツのギムナジウム改革

瀬戸口 昌也（大阪教育大学）

初期ベンヤミンにおける心理学主義批判と現象学

浅井 健介（京都大学・院生）

アドルノの社会批判における精神分析の位置

安道 健太郎（日本大学・院生）

E.フロムにおける「自己実現」論の再検討

—治療実践に関する言説に着目して—

森田 一尚（京都大学・院生）

第3部会

---

## 教師と教育的関係を成り立たせるもの

司会：渡邊 隆信（神戸大学）・大塚 類（東京大学）

「教師」の役割とはいかなるものか  
—ジャック・デリダの哲学教師論について

松田 智裕（立命館大学）

J.H.ニューマンの思想における判断力の形成  
—良心(Conscience)概念の検討を中心に—

青木 由紀子（上智大学・院生）

教師が行う実践的判断の教授可能性に関する検討

岡村 美由規（広島大学・院生）

M. ブーバーにおける教育関係論の構造  
—対話の「相互性」と「非対称性」を手がかりに—

三木 春紀（慶應義塾大学・院生）

カントの信頼論

高木 裕貴（京都大学・非常勤）



第4部会

---

## 教育における承認と政治

司会：奥野 佐矢子（神戸女学院大学）・森岡 次郎（大阪府立大学）

後期ミシェル・フーコーにおける啓蒙論の再検討

堤 優貴（日本大学）

生政治における重度障害児の代理表象をめぐる一考察  
—三人称あるいは非人称の哲学を手がかりに—

杉田 浩崇（広島大学）

フーコーの生権力理論からみた中国における感染症対策

張 林倩（名古屋大学・院生）

マイノリティにとっての「集まり」としての大学  
—アラブ・オープン大学クウェートブランチを事例に—

保道 晴奈（大阪大学・院生）

教育学におけるマルクス主義受容に関する批判的考察  
—E.ラクラウ=C.ムフのポスト・マルクス主義に着目して—

山中 翔（広島文化学園大学）

第5部会

---

## 教育実践の哲学と倫理

司会：藤井 佳世（横浜国立大学）・野平 慎二（愛知教育大学）

学校教育における思考に関する一考察

—「直接的対話」と「間接的対話」を通して—

田中 英子（早稲田大学・院生）

討議教育のデモクラティック・コミュニティ

—小学校での「話し合い活動」の実践から—

田端 健人（宮城教育大学）

佐竹 達郎（宮城県岩沼市立岩沼南小学校）

ケア倫理学の教育学的展開に関する批判的考察

—ノディングスの「ケアリング」からニーズ論へ—

坂本 達也（広島大学・院生）

ジョセフ・フレッチャーの状況倫理について再検討

～道徳教育の観点から～

林 泰成（上越教育大学）

第6部会

---

## 理性と非理性の〈あいだ〉

司会：渋谷 亮（龍谷大学）・池田 華子（大阪府立大学）

ベルクソンにおける習慣と純粹記憶の生成論

—再認の外部はあるか？—

長戸 光（東京大学・院生）

「抑圧」から「判断」へ

—S・フロイトの精神分析における「自我発達」と道徳性—

後藤 悠帆（京都大学・院生）

性教育における気まずさ（羞恥心）の普遍性について

—H.P.デュルによる N.エリアス批判を媒介にして

森 亘（京都大学・院生）

美術教育への感性学の寄与

—メルロ＝ポンティの表現論を手がかりに

常深 新平（慶應義塾大学・院生）

相貌としての「感情」—その意義と射程について

岩井 哲雄（山梨大学）

不登校の子どもたちの立ち直りに関する—考察

—気分の有する中動的な性格に着目して—

加藤 誠之（高知大学）

## 精神分析と教育 — 教育理論としてのフロイト思想 —

報告者： Deborah P. Britzman (York University, Toronto)

西見奈子 (京都大学)・下司 晶 (日本大学)

指定討論者： 西平 直 (京都大学)

司会： 白銀夏樹 (関西学院大学)・須川公央 (白梅学園大学)

フロイトの創始した精神分析は、20世紀以降の世界を形作ってきた思想運動の一つである。仮にその科学性や治療法としての有効性が疑われることがあったとしても、精神分析的な発想は私たちの認識枠組みや生活様式の一部となっているし、現代の哲学や思想はフロイトの影響なしには考えられない。

教育も例外ではない。精神分析を端緒とする深層心理学的な子ども理解は、現代の教育言説や教育実践に深く浸透している。にもかかわらずこれまでの教育学は、フロイトや精神分析は教育に部分的な影響しか与えていないとして、中心的な検討対象とはしてこなかった。

この過小評価は、教育学の精神分析への「抵抗」といえるかもしれない。ロマン主義的、性善説的な子ども観を有する教育学と、幼児性欲説や欲動理論を基盤とする精神分析とはいかにも相性が悪い。また戦争への反省を契機に平和な未来を切り開こうとしてきた戦後の教育学にとって、戦争は人間の本質に基づくために根絶など出来ないというフロイトのペシミズムは、到底認めることは出来ないものだろう。

そもそも、同じ児童期を扱うにしても、子どもたちの未来を見据える教育学と、病理の原因を幼児期に遡って求める精神分析では、ベクトルが正反対である。そのため両者の視線は、これまですれ違うことが多かった。

こうした困難にもかかわらず、本研究討議では、精神分析と教育の関連を問

いなおし、フロイト思想を教育理論として読み解くことを試みたい。そのためデボラ・P・ブリッツマン氏と西見奈子氏をお招きする。

デボラ・P・ブリッツマン氏は、教育学者でありながら精神分析家でもある。精神分析と教育を結びつける理論と実践において、世界を代表する研究者といえる。著作には、*Freud and Education* (Routledge, 2010), *The Very Thought of Education: Psychoanalysis and the Impossible Professions* (SUNY Press, 2009), *After-Education: Anna Freud, Melanie Klein, and Psychoanalytic Histories of Learning* (SUNY Press, 2003)などがある。

西見奈子氏は、精神分析を専門とする心理臨床家である。実践家としては、ポスト・クライン学派を中心とする最新の精神分析理論を日本に紹介するとともに、歴史研究としては、精神分析が日本にどのように導入されたかを検討している。著書として『いかにして日本の精神分析は始まったか——草創期の5人の男と患者たち』(みすず書房, 2019)や『精神分析にとって女とは何か』(編著, 福村出版, 2020)がある。

下司 晶は、『〈精神的子ども〉の誕生——フロイト主義と教育言説』(東京大学出版会, 2006)などで、フロイトと精神分析を教育哲学・教育思想史の立場から検討してきた。本報告では精神分析のこれまでの受容と、教育理論としての可能性を検討する。

指定討論者には教育人間学を専門とする西平 直会員を迎える。西平会員は精神分析に留まらず、シュタイナー、ケア論、東洋思想、稽古論にまで至る幅広く深い思索で知られる。精神分析関連では『エリクソンの人間学』(東京大学出版会, 1993)などの著作の他に、エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』(共訳, 誠信書房, 2011)などの翻訳がある。

本研究討議は、『発表原稿集録』をもって報告に代え、質問やコメントは、大会期間中に参加申し込み者専用のウェブサイトを受け付ける。その上で、司会を務める白銀夏樹、須川公央の両会員とともに、報告者・指定討論者が徹底的に討論し、その結果をまとめて参加申し込み者にフィードバックする。

教育哲学会の研究討議としては、はじめてのテーマ、はじめての形式となるが、皆さんとともに議論を深めていきたい。

2020年10月18日(日) 10:30~12:00

次世代育成企画

## 教育哲学のタテ・ヨコ・ナナメを繋ぐ —世代を超えた学术交流のために—

企画：次世代育成企画委員会  
(下司晶(日本大学)、生澤繁樹、井谷信彦、  
小野文生、平田仁胤、室井麗子)

ファシリテーター：生澤繁樹(名古屋大学)  
井谷信彦(武庫川女子大学)  
小野文生(同志社大学)  
平田仁胤(岡山大学)  
室井麗子(岩手大学)

「次世代育成企画委員会」による企画です。比較的研究歴の浅い会員の積極的な参加を期待します。

「教育の根底にあるのは、あこがれの伝染である」と齋藤孝が『教育力』の冒頭において述べているように、学びを駆動する原動力には憧れがあるように思われます。もちろん学びが憧れという原因によってもたらされる結果だとして、単純な因果関係に落とし込みたいわけではありません。ただ、この憧れによって学びを駆動されたという原体験が、今回の企画の出発点にあります。

考えてもみれば、憧れの対象である上の世代の先生方と繋がる機会は、驚くほど少ないのではないのでしょうか。たとえば、大学院生にとって、自らが所属する研究機関の指導教員と接することはあっても、別の研究機関に所属されている先生の指導を仰ぐことはあまりないでしょう。おそらく先行研究の著者として、いわば名前だけの存在として認識するに留まっているのが一般的でしょ

う。また、大学院を終えた若手研究者にとっても、職場を同じくする先生との交流はあっても、他大学の先生との交流の機会は限定的なように思われます。

もちろん、研究会、学会発表、懇親会等で直接に繋がる機会があります。ですが、時間に追われながら質疑応答を行ったり、先生に声をかける勇気を絞り出せなかったりといった経験をした人は、少なくないのではないのでしょうか。ましてや、一人の研究者として研究内容について相談するなど夢のまた夢。だからこそ、先生が学会等で実際に活動しているところを見かけ、名前だけの存在が急激なりアリティを持ち始めることに驚いたり、あるいは憧れの先生から質問をしてもらったり、懇親会で声をかけてもらったりする喜びには筆舌に尽くし難い感動があるのではないのでしょうか。

そこで、4回目となる本年は、「教育哲学のタテ・ヨコ・ナナメを繋ぐ」と題し、世代や大学の枠を超えた教育哲学者の学術交流の推進を目的とした、大会参加者同士の緩やかな交流、意見交換、相談の場を設けたいと思います。

10名の先生方をお呼びし、それぞれのテーブルを囲いながら、たとえば若手研究者の側から、現在取り組んでいる研究テーマやその悩みについて相談をしたり、あるいはベテランの先生方の側から、当時を振り返ったライフ・ストーリーを述べていただいたり（あるいは脇道に逸れた話をしたり）するなど、充実した時間を実現したいと考えています。

とはいえ、すでに多くの会員がご存知のように、昨今の新型コロナウイルス感染症の拡大をうけ、対面でテーブルを囲うことは難しい状況にあります。したがって本年は、オンライン会議システム（Zoom）による交流会を開催いたします。5つの部屋を開設しておりますので、飲み物などを口にしながら、気楽にご参加いただければと存じます。

なお、部屋のアドレスの通知方法など詳細につきましては、9月中旬までには教育哲学会ホームページに掲載する予定です。

2020年10月18日(日) 14:15~16:15

## ラウンドテーブル

### ROUND TABLE 1

# 出生の可能性と暴力性 — 出生主義と反出生主義のあいだで —

企画者・司会者 : 小玉 重夫 (東京大学)

指定討論者 : 村松 灯 (立教大学)

報告者 : 小島 和男 (学習院大学)

福若 真人 (四天王寺大学)

樋口 大夢 (東京大学・院生)

田中 智輝 (立教大学)

教育という営みは概して子どもが生まれるという出来事を肯定する行為であり、教育学は誕生によってもたらされた新しく異質なものととも生きる技法を探究してきた。そこでは子どもが誕生するということの「善さ」が前提とされている。誰もが等しく「生まれてこないほうがよかった」とする反出生主義の命題は、私たちの多くが共有している前提を根本から揺るがすものである。にわかには受け入れがたいように思われるこの命題は、しかし、一蹴できない論理性と検討すべき倫理的な論点を含んでいる。

本ラウンドテーブルでは、出生主義と反出生主義の思想的関係を検討することを主たる課題とする。そのうえで、反出生主義がアクチュアリティをもちつつある今日的状況に教育哲学はいかに応答しうるのかについて批判的に議論を深めたい。



ROUND TABLE 2

---

## 教育における分配的正義論の可能性（2）

企画者・提案者：高宮 正貴（大阪体育大学）

提案者：橋本 憲幸（山梨県立大学）

児島 博紀（富山大学）

指定討論者：生澤 繁樹（名古屋大学）

昨年のラウンドテーブルを経て改めて「教育を分配する」とはどういうことかが課題となった。

この教育の特殊性への問いは大きく2つに分けられる。(1) 分配的正義論一般では、資源（金・物など）、ケイパビリティ・機能、効用の3つの尺度で捉えられる。しかし、教育はコミュニケーションであるため、教育を通じて資源（金・物など）をケイパビリティ・機能（資質・能力）に変換するといった観点も考慮すべきではないか。この教育の特殊性から、教育という「財」を「資源」と見なしてよいか、それに還元されない「関係性」と見なすべきかという問題も派生する。(2) 「教育が十分に分配されていない」とはどのような意味か。グローバルな地平では、他者のもとにあるべき教育とは何か、また、なぜ教育を分配すべきかは自明でない。

今回はこれらの論点についてさらに分析を深めるとともに、プラグマティズムの立場から分配的正義論の枠組みを批判的に検討する。

ROUND TABLE 3

---

## 人間形成概念の再検討 —理論と経験をつなぐには—

企画者 : 野平 慎二 (愛知教育大学)  
藤井 佳世 (横浜国立大学)  
司会者 : 鳥光 美緒子 (中央大学)  
提案者 : 平田 仁胤 (岡山大学)  
伊藤 敦広 (作新学院大学女子短期大学部)  
野平 慎二 (愛知教育大学)

現代ドイツ教育学における人間形成論的バイオグラフィ研究では、多くの場合、自己関係、他者関係、世界関係の変容をもって人間形成と捉える「変容としての人間形成概念」が共通の出発点に置かれている。この立場を代表する H.-Chr. コラーによれば、この人間形成概念は古典的な人間形成概念 (フンボルト) に依拠しつつ、経験的研究との接点をもつものであり、またその変容は言語ゲームの変容として表れるものであるという。他方、このような人間形成概念の規定に対しては、古典的人間形成概念が備えていた規範的、批判的含意を欠くのではないか (規範性の問題)、経験的現実の分析に耐えうるものなのか (経験との接合性の問題)、といった疑義が向けられてもいる。このラウンドテーブルでは、古典的人間形成論研究、言語ゲーム論研究、バイオグラフィ研究の立場からそれぞれ人間形成概念と経験的現実との接合可能性を問い、人間形成概念の再検討を試みたい。



## 教育哲学会第 63 回大会準備委員会

---

### 【委員長】

下司 晶（日本大学文理学部）

### 【事務局長】

間篠 剛留（日本大学文理学部）

### 【委員】

櫻井 歓（日本大学芸術学部）、柴山 英樹（日本大学理工学部）

渡辺 哲男（立教大学）、富田 純喜（高崎健康福祉大学）

松岡 侑介（日本経済大学）、堤 優貴（日本大学文理学部）

安道 健太郎（日本大学大学院・院生）

---

事務局：〒156-8550

東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部教育学科 間篠研究室内

E-mail：pesj2020nu@gmail.com

### [表紙デザイン]

廖 穎彤（日本大学文理学部・学生）





**教育哲学学会大会プログラム**

*The 63rd Annual Meeting of the Philosophy of Education Society of Japan*

教育哲学学会第63回大会準備委員会事務局

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部教育学科 間篠剛留研究室 気付

Email : [pesj2020nu@gmail.com](mailto:pesj2020nu@gmail.com)